明烏後編　楚満人作　英一水画　近刻

是ゝや初編明烏壱の巻ゝうり尓の所あゝて浦里が廓よ
あやそこめして時次郎ゝ浦波半五郎が
赤縄ゝむすびそめ濃そうして時次郎
ろの廓ゝ通ふ事よのつねならず花又好
甚三郎ゝ落出辛ふじて始終
園まで○
綴り来ん申ノ初冬書肆

青林堂謹白

浦甲時次郎　明烏後正夢巻之十五

江戸　南仙笑楚満人　作

瀧亭鯉丈　合作

廿六田

そのとき、あらうじにもいへるごとく、其時彼浪人主人文藏よりあまたもらひ受たる金子を、一人にてつかひ捨んも本意なしと、一ト間で寝ころびながら、あれこれと思ひめぐらせしが、最前よりの一五一十あまさず聞てゐたる老女、ものごしよろしく、茶をすゝめ、扨申上ますは、お客様のお身の上、お国元はいづくにて、何故に此所へ御逗留なされしぞ、委しくうけたまはりたしと、いとねんごろにたづねければ、浪人ほろ〳〵と涙をこぼし、

一通申さん耳うつくしき
筋なるもの
館よ奴奉公
の用意なんでありの
小姓遠脇胎せ
賭まじ。
賭すべき
ろう
憂い彼が犯
牛まで
ひそ
ぐ
こそ
甲錦ちょと
ものを着開
通ってう犯
ろ
りんじ
の教重ろうが開
の程のろ
ろう
ぶべ
ゆうきょ
ひ
女
ひそ
ぐ
ろく
ひ
被
そのこ
うれ
金

縁とて女房少盃今のもてなし
の
着もつゝんとへ神もつゝめ男のもてなし
とこそ
数知らずさへ五十小盃
あまた
思ふまゝ
うち
くみかはしつゞ雪こそ
きの
ふれとゝろゝえ
ゆとれべ手ことゝもそ
さゝ
ゆとれべ手ことゝもそ
ひゝの
そのこゝろ
まぐまで酒呑満ぐ盃の
ふゝぎ
不思素に
ひとよ
あへまくよ二夕夜さゝと縁の

かくも聞こえそうけてうるはしく嘗めそ
たゝ有岡城の今ぞもみぢの
とゝろ〳〵と嘗てうるはしく嘗めそ
ぎこし家ゝぼ
浦里おそろしぐ
取有兒 里
きのぼんあるこ」ろ「ト聞よて
まゝこゝ前の娘の家とこ
あゝぼの
都のせんぴ飛氏海てのこ

そふるもとぎ
と
あくる日・うるくてぞ浪おき
ありて
みそうそふ実の娘・家とのも
ひとへやうまろ経そ
ふたりの
まきものつる
ふたりの
ふたりの
ふたりの


文三
於熙おてる


芳里画
芳綠塚

人間の引連れて往來
おんなの、まゝの
思ふまゝの關
こゝや ひとり
所更婚入吸
りふまゝ
求るうちに
もろもろ
支そとおも
ものゝ
ものゝ
ものゝ

婆く苦まぎれ
あるとき
或年の夏
持病の癪
つま
をおこして
ひ子のやまひ
こ
苦しみ
くるしみ
ける
ゆへ
ゆえ
つごこ
我子ながら
わがこ
もてあつかひ
する
ゆへ
ゆえ
そこそこ
それ
の外一人
ひとり
の男に
おとこ
様
さま
ざまの
五のめ
うつ
せめて
こころ
せ
こころ
べ
ども
ども
ども

みも妹の歌の心薩摩塚畢竟
てけるぞ一ツ文言ふ迄もなく感ぎ
思ひ妹代りに死ハ己と度胸
いふ人と成そして彼金
て節実ハ武士の其丈ここまでの
主を殺やシテ其丈ここまでの
忠義人と称
○ぶ〜まだも
ぜう
志ハ感ずべき事ながら
ちく
父の骨肉ぞかし
ちく
父上のさそうで
ろく
頼ミ〜主人
ぶく
ハ何の為の人と
ろう
ぶ〜薩摩塚お金忠

ちゃ　ゆ　きつね　ぎつね　うどん　そば
千葉家の蕎麦屋に神酒与三郎と
ひそま　　　

うゆ（こゝろ）ゆきもの兒河原（あわら）のくらぐら猶方（なほかた）とめぐる人多集（あつ）め。

街（ちまた）のうたそよ（うたよそ）解（とか）ふるぐらいふく（ふくいふ）もあらんぐ（ぎ）くあるそ（そこ）の。あぐ（ぐあ）

癘病（れいびやう）こゝろ（こゝろり）治（なほ）ひしと（とひし）聞（きこ）ゆ。

おくのぐ（ぐおく）おくぐ（ぐおく）きて（きこと）思（おも）ひ（ひこと）の。

形（かた）ちぐ（ぐかた）ちぐ（ぐかた）ちに（にぐ）思（おも）ふ（ふこと）の。

きくべ（べく）たる（るべ）のひと（ひとぞ）ゆ（ゆく）玉手船（たまてぶね）。

うたくと（とうた）あるもの（のあ）ぬ（ぬる）ひと（ひとぞ）毎（ごと）に多（おほ）くの（のお）

ぜる（ぜるを）。おくのぐ（ぐおく）お轟（とゞろ）さ（さお）ぬ（ぬる）ひと（ひとぞ）

ぐ（ぐこ）ろ（ろこ）ぐ（ぐこ）ろ（ろこ）ぐ（ぐこ）ろ（ろこ）

主のまうでこそ今日もそうびの舟
のすゝみ
郎さるのかしこまりて
文をば
○ゆくく
めぐりあふまでは
○うぐひすの
○ほとゝぎす
○ふぢの
○しのぶ
○あぢさゐ
○なでしこ
○ゆり
○をみなへし
○ふぢばかま
○あさがほ
○ひぐらし
○まつむし
○すゞむし
○きりぎりす
○ふみづき
○もみぢ
○ちどり
○しぐれ
○ゆきの
○ひとよ
○ふたよ
○みよ
○よもすがら
○あかつき
○ゆふべ
○あさぼらけ
○ひるつかた
○ひるさがり
○よひ
○よなか
○あけがた
○ゆふぐれ
○ゆふやみ
○ありあけ
○つきかげ
○ほしかげ
○ゆきあかり
○ゆきまもひ
○ゆきのあした
○ゆきのゆふべ
○ゆきのよ
○ゆきのよなか
○ゆきのあけがた
○ゆきのゆふぐれ
○ゆきのゆふやみ
○ゆきのありあけ
○ゆきのつきかげ
○ゆきのほしかげ
○ゆきのあかつき
○ゆきのゆふべ
○ゆきのよ
○ゆきのよなか
○ゆきのあけがた
○ゆきのゆふぐれ
○ゆきのゆふやみ
○ゆきのありあけ
○ゆきのつきかげ
○ゆきのほしかげ
○ゆきのあかつき
○ゆきのゆふべ
○ゆきのよ
○ゆきのよなか
○ゆきのあけがた
○ゆきのゆふぐれ
○ゆきのゆふやみ
○ゆきのありあけ
○ゆきのつきかげ
○ゆきのほしかげ
○ゆきのあかつき

時次郎
浦里
妻

春日屋
時次郎
妻
旅照



戸隠の
長五郎
妻

藝者
浪吉

二見浦
重三郎
於松

土手ノ平

於露

ものの何者かありて人を別室に導きたるなどあれば主家の老人よりそのことを聞きて二見市之丞ありうえは決して怪しきことあるべきにあらずと思いながらも心ならず立ちあがりて案内に従いつつ行きぬ。

二見市之丞は

て見たいと云ふ。彼は家の老僕今
は老衰もすでに甚しくて起居も
にて神隠しに遭ひたりと。彼の
軍後二ヶ月目に漸く帰りたり
なほ其土産にとて持ち帰りし
残らず焼けたりと。

玉ぶちの秋ちかくなるまゝ
かくてきたる感ども

中まらふ「もとうもろこし」。
うらの庭柿ぶどう金次郎柿渋柿
二見重左ろう衛門時次郎浦野あ
うまうま
源兵へともろこし家よ高山重
とのひそう
太平おまつ助夫方して敵
うてき
うてを。主君ふ殺よりも
ちきけ
千栄家の重三郎と名乗
にぜ
せ二代目重三郎と名乗
おうと
みしろう又お松重三良と
ちろう

もの落ちが外にもこれまでに二見ぐらひあれども。
べき物事ならず。とかくまどひ。
狐けうの目をくらされ。
一ちやくくらひ。
重左つぐ斗らひ。
勢ひもつぐ。
と云うぐ人ごみ。
ぬまこ時分。

夫(それ)。お腹(なか)が空(すい)ては
尽(つく)し本(もと)能(のう)也(なり)。
業(わざ)まで。
ちからの強(つよ)き。
腕(うで)ぶし高(たか)くて家(いえ)
ふせぎ。
も。人(ひと)を
守(まも)り。親(おや)の
に。
おまびやぐ。
それ
なる男子(おとこご)。
浦(うら)
の
の
の

家に出入して睦まじくまづ
ゞ方より野宮の宮ゐ山と
時候の歩行と同じ調子和順して
まゝ父もよろこばめてそれ〳〵
○作者依憑這草紙
もとぐまゝ幼稚うちも
かゝり上戸年ゝ歳ゝ
抜元の母ゞ馬又

再(もど)

(ま)

(ま)

(ず)

(ひっ)(ぱ)(ら)(ず)(ま)(ま)(ま

こゝろもあらで候ふ
ようの時儀の君子の
国人稚蒙のごとよ
まもぐともうまもぐき
おん戯墨よ成て
百年遠矣のうぢ文
あくて
衛人もひぶも



一名神医仁行記

この後日ごとの事へ二編。
こゝろよき読本の
至て面白つゞきまで乞しるし

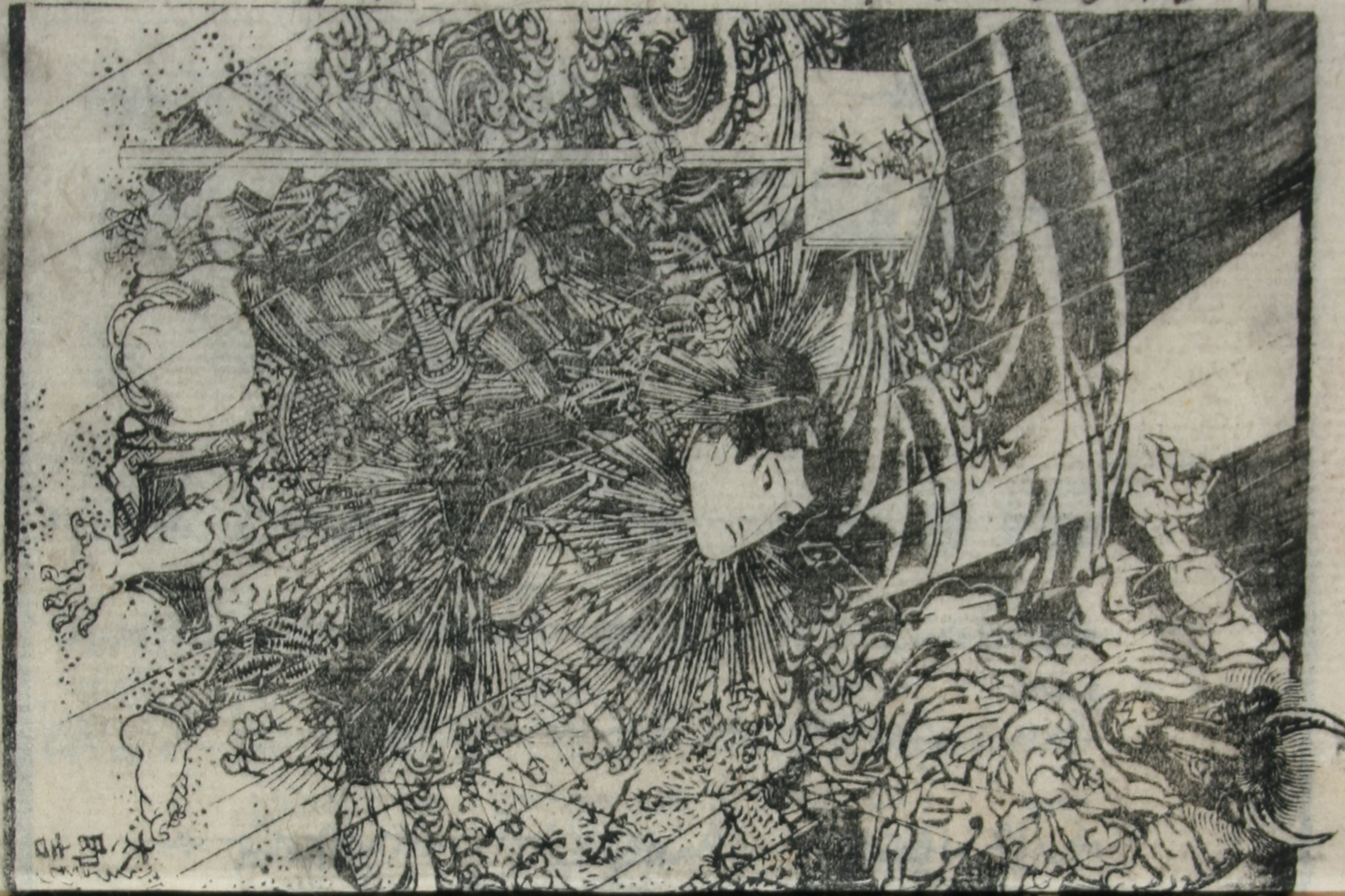


二代目
山崎三次
名屋
浦里

あけ
ぐれ
後日
全本六冊
出来



二見十三郎
おもの



浦里時次郎後日ばなし

明烏寝覺繰言

全部三冊

南仙笑楚満人著

瀧亭鯉丈校合

溪齋英泉画

このもの這物語ハ十五年の後の物語ゟ
きて正ぢう子春卯月の末の事なり
山名屋文藏時次郎が二子時ゝ助が事ども
ゟの初烏と共に書續す末ゟ